

— 証 —

R e e

さらさらさら……

秋風に、落ち葉が弄ばれながら舞い散っていった。

もうしばらくすれば冬がやってくる。ここ、シラカバ牧場は冬支度で慌ただしい毎日を送っていた。

ダダッー！ ダダダダッー！ ハーッ！ ハイヨーッ！

乳牛たちが牧草地を走り運動をしていた。毎日の日課である。

牧葉団兵衛と宇門大介は馬にまたがり、牛たちが列を乱さないように監視をしながら追いたてていた。

「それー！」

団兵衛は群を離れようとした乳牛に投げ縄を放ち、無理矢理引つ張り方向を変えた。

大介は、後方から牛たちを追い込んでいた。

「こらー！ 大介！ 列が乱れとるぞー！ しつかり見張らんか！」

団兵衛に怒鳴られて、大介は前方の牛を追いたて

た。

「ばつかもーん！ 後ろが乱れとるぞー！ さつさとしろ！」

大介は、また団兵衛の怒鳴り声で後方に移動した。

団兵衛の怒鳴り声を耳にした牧葉ひかるは、慌てて団兵衛のところに駆け寄ってきた。

「お父さん！ 大介さん、ちゃんとやってるじゃない。何八つ当たりしてんのよ！」

「なんじゃとー？ 八つ当たりとはなんだ。わしは大介をびしつと指導してるんじゃ！ サボってばかりで、あんな半人前、わしがきつちり教えんと全然使いもんにならんわい！」

団兵衛は、馬上で腕組みをしながら大介の様子を伺っていた。

「何言ってるのよ。さぼってるのはお父さんですよ。見てないで一緒に追い込んだらどうなのよ！ 全く……！」

そう言っつてひかるは、あきれた顔で団兵衛に食っつかかった。

「何をいつとる！ わしは、ここで監視してるんじゃ！ ええーい！ うるさい！ こら大介ー！ もつと機敏に動かんか！」

団兵衛に怒鳴られながら、大介は右往左往してい

た。

「お父さんったらもう！」

ひかるは腕組みをして、ふくれっ面をした。

「おじさーん！ そろそろ牛舎に入れていいですかあ？」

大介は、馬を走らせながら団兵衛に大声で問いかけた。

「おおー！ 入れているぞ！ しつかり見張って追い込むんじやぞ！」

団兵衛は、馬上で腕組みをしながら大介の行動を監視していた。

「はーっ！」

大介は、牛の列の前、横、後ろと慌ただしく走り回りながら牛舎に牛を追い込んでいった。

牛たちが牛舎の前に集まると大介は馬を降り、牛を一頭ずつ所定の檻に入れていった。

「結局大介さんが一人でやってるんじやないの！ お父さんはさぼってただけじやない！ 全くもお！」

「大介さーん、私も手伝うわ！」

そう言っつてひかるは、牛舎の方に走り出しているた。

「待てー！」

走り出したひかるに向かって、団兵衛は投げ縄を

放った。

「ぎやー！ 何すんのよ！ お父さん！」

ロープで引つ張られたひかるは、頭に来て団兵衛に怒鳴った。

「ぼつかもーん！ 何が大介さーんじや！ あれほど言ってるのに、お前はまだわからんか！ 大介には近づくなつて言ってるじやろが！」

ロープを引つ張りながら、団兵衛が馬を降りて近づいてきた。

「何よ、二人でやった方が早く片づくでしょ！ もう、お父さんったらいい加減にしてよね！」

そう言いながらひかるは、ロープを巻き付けられたまま歩き出し、団兵衛を無理矢理引きずっていった。

「ぼつかもーん！」

団兵衛は、ひかるに引きずられながら抵抗していた。

「あはは！」

その様子を見ていた大介は、大声で笑った。

「何がおかしいんだ！」

大介に笑われて頭に来た団兵衛は、また怒鳴った。

「大介！ 大体あの追い方はなんだ？ ええ？ もつとしやきつと出来んのか！」

団兵衛は片手にロープを持ち、大介を指さし怒鳴つ

た。

「すみません、おじさん」

大介は、面目なきように笑いながら頭をかいた。

「大介さん、謝らなくていいわよ！ お父さんが悪いんだから！」

ひかるは、ロープに縛られながら大介に近づいた。

「こりゃ！ ひかる、なんで大介の肩を持つんだ！ わ

しはお前の父親だぞ！」

団兵衛はひかるに向かって怒鳴った。

「お父さん！ 何言ってるのよ！ もう！」

ロープを解きながら、ひかるは頭に来て団兵衛に怒鳴った。

「まあまあ、ひかるさん、いいじゃないか」

大介は、ふくれっ面のひかるを制した。

「ぼつかもーん！ 大介！ ひかるに近づくなと言ってるじやろが！」

団兵衛は、また大介に怒鳴った。

「大介！ 罰として牛の手入れを一人でやれっ！ いか！ 一人でだぞ！」

「お父さん！ なんの罰なのよ。大介さんが何をしたって言うのよ！ いい加減にしないと、本当に怒るわよ！」

ひかるの怒りは、頂点に達した様だった。

「まあまあ、ひかるさん。ここは僕がやるから、ひかるさんは馬小屋をお願いするよ」

大介は、微笑みながらひかるをなだめた。

「そうじゃ！ ひかる、わしと一緒に馬の手入れをしよう。なっ！」

団兵衛は、ひかるの顔色を伺いながら、ひかるの背を押した。

「何よ。お父さんと一緒に面白くないわよ！」

ひかるはふくれっ面のまま馬小屋に走っていった。

「ひかるー！ 待ってくれー！」

団兵衛は、叫びながら走り出した。

「ははは！」

大介が笑うと、団兵衛は振り返って大介を睨み、馬小屋へと消えていった。

やれやれとため息をつきながら、大介は牛の手入れをはじめた。

馬小屋で馬たちをブラッシングしながら、ひかるは団兵衛に問いかけた。

「お父さん、なんで大介さんに、あんなに文句ばかり言うのよ。全く……」

「何を言う！ 大介は、あれでも宇門先生の息子なんだぞ。いずれはこの牧場の共同経営者になるんだ。わしがびしつと教えてやらなきゃ、先が思いやられる

わい！なのにな、いつもへらへら笑ってるばかりで、何を考えてるのかちーともわからん。日本男児というのはな、やんちゃなぐらいが丁度いいんじや。あんなぼーつとした青二才、性根を叩き直さねばどうにもならんわい」

「なによ、お父さん、そんなこと考えてたの？」

「それにな、この間もススキが原飛行場で、お前達が危ない目に遭ってるつてのに、助けに行つてもくれん！バスが宇宙船に吸い込まれたときだつて、甲児君が居たから助かったようなものの、大介はなーんの役にも立たん」

団兵衛はブラシを持つ手を止めて、腕組みをして憤慨してみせた。

「そんなこと言つたつて、甲児君みたいに大介さんが円盤に乗れる訳じゃないんだから、仕方ないじやない」

ひかるは忙しくブラシを動かしながら、団兵衛に言い返した。

「少しは見込みがあると思つとつたがな、最近は何んだかんだ言つて、すぐどつかへ行つてさぼる。ありやきつと甲児君に焼き餅焼いてるのかもしれんな。どう考えたつて甲児君の方が、宇門先生の息子にふさわしいじやろうが」

「そう言えば、最近大介さんよく居なくなるわね。研究所の方が忙しいのかしら？」

ひかるも不思議そうな顔をした。

「大体、宇門先生もなんであんな男を息子にしたのか……」

「え？ どういう意味？」

ひかるは、団兵衛が言つた意味がわからなかった。

「いや、宇門先生は立派なお人なのに、息子は何を考えてるんだか、ぶらぶらと中途半端に牧場の手伝いをやつとる。甲児君みたいなガッツのあるヤツが息子だつたら良かったのに。わしは宇門先生の事を思うと情けないわい」

「お父さん、無茶苦茶なこと言わないでよ、全くもう。大介さんは牧場の仕事をちゃんとやつてるじやないの。甲児君とは違うんだから、比べたらかわいそうでしょ。お父さんこそ、UFO、UFOつて、さぼつてばかりじやない」

ひかるは腰に手を当て、団兵衛に向かって小言を言い出した。

「いや？ いや……あの、それはだな……わしは宇宙にロマンを求めているのだ。甲児君も円盤に乗つてロマンを追い求めておる。宇門先生もロマンを追いかけて研究所を作つた。男という者は常にロマンを追

「い求めるものなのだ。おお宇宙よ、広大な宇宙よ」  
 団兵衛は、手を広げて大げさにジェスチャーをして見せた。

「だがのお、大介にはロマンのかけらもない。ただ牧場で遊んでるだけで、あやつには夢のかけらも見あたらんわい」

「お父さん、自分と考え方が違うからって大介さんを馬鹿にすること無いじゃない。大介さんには大介さんの考えがあるんだから！」

ひかるは団兵衛に向かって、口を尖らせて文句を言った。

「ほお？ 大介にどんな夢があるのか、お前は知っているのか？ ええ？」

今度は、団兵衛がひかるに向かって、口を尖らせて応戦した。

「え？ そりゃ私だって知らないけど……でもきつと大きな夢を持つてるに違いないわよ」

「ひかる、いい加減にしろ。いつつもそうやって大介の肩を持つ。あんな男の何処がいいんじや！」

今度は、団兵衛がひかるに意見し出した。

「し・知らないわよ！ もう！」

そう言っつてひかるは、ぷいっとそっぽを向き、それ以上話はしなかった。

ひかると団兵衛が、そんな話をしているとはつゆ知らず、大介は一人黙々と牛の手入れをしていた。

ピーッピーッピーッ

かすかにアラーム音が聞こえた。それはバギーに取り付けてある無線のコイル音だった。

大介は慌てて手を止め、外に停めてあるバギーに走っていき、無線のマイクを手にした。

「はい、大介です」

「大介、円盤獣が大気圏に近づいている。すぐ研究所に来てくれ」

無線の相手は、大介の父、宇門源蔵だった。

「はい、わかりました。すぐ行きます」

大介は無線のスイッチを切ると、慌ててバギーにまがり、エンジンを吹かしながら研究所に向かった。

バキューン バキューン

「あら？ 大介さんのバギーの音だわ」

ひかると団兵衛が慌てて外に飛び出すと、大介がバギーで走っていくのが見えた。

「こらー！ 大介、何処へ行く！ 牛の世話はどうしたんじや！ おーい！」

団兵衛が大声で大介を呼び止めたが、大介は走り去っていった。

「大介さん、どうしたのかしら？」

ひかるは心配そうな顔で、大介の走り去った後も、その残像を眺めていた。

「あいつ、また仕事をほっぽりだして出て行きおつたな！ 牛の世話一つ満足に出来んのじゃから！ 今度戻ってきたら、きつーいお灸を据えてやるからな！」  
 団兵衛は、頭から湯気が出そうなど怒りを露わにしていた。

宇宙科学研究所に到着した大介は、バギーを玄関に横付けし、慌てて観測室に向かった。

「父さん、また円盤獣が現れたのですか？」

観測室に駆け込んだ大介は、開口一番、宇門に問いかけた。

観測室では、山田所員、林所員、佐伯所員が慌ただしくデータ収集しており、メインスクリーンには円盤獣とミディフォアの編隊が映し出されていた。その前で難しい顔をして眺めていた宇門源蔵と兜甲児は、大介の声に慌てて振り返った。

「大介、ベガ星連合軍の編隊だ。しかもかなりの数でやってきている」

メインスクリーンの前に立った大介は、その映像に驚いた。円盤獣は一機だが、それを纏っているかのよ

うにミディフォアが群を成していた。

「大気圏突入！」

林は、レーダーシステムを覗き込みながら大声で伝えた。

「父さん、出撃します」

大介は踵を返し、走り出した。

「大介！ 敵はかなりの数だ。充分注意するんだぞ。決して無茶はするんじゃない。いいか！」

宇門の声に足を止めた大介は、はい。と返事をして再び走り出していった。

「所長、俺も出撃します。あの数、大介さん一人じゃ大変だ！」

甲児も応戦すべくドアに向かって走り出した。

「待ちたまえ！ 甲児君」

宇門は、慌てて甲児を制した。

その声に甲児は立ち止まり、振り返った。

「君はいつも無茶をしすぎだ。命は一つしか無いんだ。それを考えて行動してくれたまえ。わかったかね？」

宇門は、いつも甲児に冷や冷やされられつばなしで、いつか大怪我をするのではないかと心配でならなかった。

「わかってますよー、そんなこと。じゃ、行って来ま

す！」

そう言いながら、甲児は片手をあげて走り去っていった。

「グレンダイザーが発進します！」

グレンダイザーの出撃準備をモニタしていた山田所員は、グレンダイザーのコックピットモニタのスイッチを入れた。

「大介、気を付けるんだぞ！」

宇門は、グレンダイザーのコックピットモニタに向かって大介の無事を祈りながら再度念を押した。

こくと頷いた大介は、グレンダイザーGO！のかけ声とともにグレンダイザーを発進させ、ベガ星連合軍の編隊に向かって一直線に飛んでいった。

甲児は、TF Oに乗り込むべくシラカバ牧場に向かっていった。

キキキー！

ジーブを勢いよく止めた甲児は、運転席からひらりと飛び降り、TF Oの格納庫目指して走っていった。

「あら？ 甲児君、どうしたの？ また円盤がやってきたのー？」

遠くで甲児の姿を見つけたひかるは、大声で呼びかけた。

「おお甲児君、また出陣かね。頑張ってくれたまえよー！ わしも陰ながら応援しとるぞよ」

団兵衛は、格納庫目指して走っている甲児にエールを送り、甲児は片手をあげながらTF Oに乗り込んだ。

程なくして、グレンダイザーはベガ星連合軍の編隊に遭遇した。

「行くぞ！ ベガ星連合軍！」

グレンダイザーと対峙したミディフォーは、編隊を変え、戦闘態勢に入った。

「スピンスーサー！」

大介は、グレンダイザーのスピンスーサーで敵の編隊を崩しにかかった。

群を成して襲いかかるミディフォーが、ビーム砲を発射しながら右から左からと襲いかかる。

「スピンドリル！」

大介はスイッチを入れた。

ブシュン！ ブシュン！ ボワッ！ ドゴーン！  
数機が爆破された。だが爆破の隙間から、また群を成してミディフォーが襲いかかる。

ビームがグレンダイザーをかすめた。

大介はグレンダイザーを旋回させ、ミディフォーの

攻撃を避ける。

後方からミディフオーが数機、ビームを発射した。スベイザーのボディに直撃する。

大介は、グレンダイザーを急上昇させた。ミディフオーが数機、後に続く。上昇したかと思ったら、急降下させて、正面からミディフオーにスペースサンダーをぶち込んだ。

バリバリバリー！ ドッバーン！

スペースサンダーをまともに食らったミディフオーが吹っ飛んだ。

ズダダダーン！

ミディフオーの編隊の隙間から、グレンダイザーめがけて円盤獣がビーム砲を発射した。

「ぐわっ！」

円盤獣のビーム砲は、ともにスベイザーの上部に命中し、その衝撃で大介は声をあげた。

「くそっ！」

大介はグレンダイザーを旋回させ、円盤獣の攻撃を避けた。が、避けた先にはミディフオーが数機待ち受けていて、一斉にビーム砲を発射してきた。

避けきれず集中砲火を浴びるグレンダイザーだが、そのままミディフオーに突っ込み、体当たりで爆破し、またも上昇した。

後部にミディフオーが群を成して追いかけてくる。

急旋回し、メルトシャワーを発射。

ジュワジュワジュワー！ ボムッ！ ドゴーン！

ズババババーン！

またも円盤獣のビームが、グレンダイザーの右上部に命中した。

「うわあああ！」

ビーム砲の衝撃が大介の体を突き抜けた。

「はあはあはあ……」

大介は、肩で大きく息をしていた。

正面に対峙した円盤獣が変形した。二枚の皿を合わせた様な円盤の形が縦になり、中央に亀裂が入ったかと思ったら顔と尻尾が現れ、トカゲの様な形になった。皿のような円盤部分は両手に握られ、盾となつてグレンダイザーの攻撃を尽く跳ね返した。

「スピンスーサー」

大介は、スピンスーサーのスイッチを入れたが、盾に守られ跳ね返された。

円盤獣と対峙している間に、ミディフオーはグレンダイザーの左右後方と、グレンダイザーを取り囲んで一斉発射した。

ビビビビーツ

大介は堪らず降下したが、円盤獣の尻尾が触手の様に



延び、グレンダイザーの胴体からみついた。

ガッツ！

「うっ！」

急に動きを封じ込められ、大介は前のめりになって胸を強打した。

すかさず円盤獣は、尻尾から強力な高压電流を放った。それと同時にミディフォォもビーム砲を一斉放射する。

「ぐわあぁー！」

大介の体を電流が突き抜ける。

「大介！」

観測室で、グレンダイザーのコックピットモニタを凝視していた宇門は、思わず叫んだ！

円盤獣とミディフォォの攻撃は止まず、大介は歯を食いしばり、なんとか円盤獣を振り切ろうとグレンダイザーをパワーアップさせて降下したが、絡みついた尻尾はびくともしない。

ズドーン！ズドーン！

甲児が乗ったTFOが到着し、円盤獣の尻尾の付け根を狙ってミサイルを発射した。

円盤獣は、堪らずグレンダイザーを放し、その弾みにグレンダイザーは急降下した。

「大介さん！大丈夫か？」

大介は、慌ててグレンダイザーの体勢を立て直し、旋回した。

「ああ甲児君、助かった。すまん」

TFOは急上昇し、群を成しているミディフォォに向かってミサイルを発射した。グレンダイザーも上昇し、回りにあるミディフォォを蹴散らしながら円盤獣に向かって行った。

円盤獣は口からビーム砲を発射したが、グレンダイザーは体勢を傾け、それを交わし、ハンドビームを放射した。

円盤獣は、ハンドビームを手が付いている盾で避けた。

「ダブルクラッシュヤーパンチ！」

グレンダイザーの両腕が飛び出した。が、やはり盾に跳ね返される。

「くっそ！武器が効かない！」

大介は地上戦に持っていきたいところだが、ミディフォォの数が多すぎてTFOだけでは防ぎきれない。とりあえずミディフォォを撃退することを優先した。

「ミサイル発射！」

TFOは、右へ左へと小さい機体を武器に、ちょこまかと動き回りながらミサイルを発射していた。

TFOの動きに合わせ、グレンダイザーもミディ

フオーを撃退していく。だが、ものすごい数のミデイフオーは、なかなか減らなかつた。

「甲児君！ 危ないっ！」

TFOはミデイフオーに回り込まれて集中砲火を浴びた。

その間に割って入るグレンダイザー。がしかし、まとも円盤獣の尻尾が延びてきた。

かろうじて巻き付かれるのは逃れたものの、口から吐き出すビーム砲をまともに食らった。

「う・ううっ！」

「くそっ！ いったいミデイフオーは何機あるんだ。一機ずつ倒したのでは埒があかない。そうだ！」

「甲児君、一斉放射する。下がってくれ！」

「わかつた！」

甲児は、そう言うのとTFOを急降下させた。が、ミデイフオーはTFOの後を追う。グレンダイザーはその間に割って入りTFOを避難させた。

「メルトシャワー！」

グレンダイザーは、メルトシャワーを噴射しながら回転をはじめた。

360度メルトシャワーが飛び散る。グレンダイザーの回りを取り囲んでいたミデイフオーが、一気に爆破された。

「はあはあ……これで一気に減ったぞ！」  
ドゴンッ！

回転を止めた途端、グレンダイザーめがけて円盤獣がビーム砲を発射した。

ビーム砲が、グレンダイザーの尾翼に当たり吹っ飛んだ。

体勢を崩したグレンダイザーは、急降下していく。

「くそっ！ よし、地上戦にスイッチだ！ シュートイン！」

尾翼を吹き飛ばされたグレンダイザーは、機体を揺らしながらも急降下していった。

「ダイザーGO！」

グレンダイザーがスぺイザーと分離して、地上に降り立った。その動きに合わせて円盤獣も地上へと降りた。

「ダブルクラッシュヤーパンチ！」

円盤獣と対峙したグレンダイザーは、両腕を発射したが、盾に跳ね返されてしまった。

「スペースサンダー！」

大介はスイッチを入れたが、やはり盾に跳ね返されて円盤獣にダメージを与えられない。

「ミサイル発射！」

TFOが、円盤獣めがけてミサイルを放った。が、

やはり盾に跳ね返されてしまう。

「シオルダーブーメラン！」

シューーン！ カキーン！

「シオルダーブーメランも効かない。くっそ、どうしたら……！」

「ミサイル発射！」

甲児は、接近して円盤獣を攻撃する。

「危ないっ！ 甲児君！」

そう大介が叫ぶや否や、TFOは円盤獣の尻尾でなぎ払われてしまった。

「うわあああー！」

TFOは、小高い丘の斜面に激突した。

「甲児君！ 甲児君！」

「うっ、うううっ……！」

激突のショックで、前のめりになって頭をぶつけた甲児は、額から血を流していたが、意識はあるようだった。

円盤獣は、TFOにとどめを刺そうと尻尾を振りかざした。

グレンダイザーは、慌ててTFOの前に走りだし、円盤獣の尻尾を受け止めた。

円盤獣の尻尾は、グレンダイザーの首に巻き付いて、高圧電流を発射した。

「ぐわあああー！」

電流が大介の体を駆けめぐる。

「大介さん！」

「こ・甲児君……早く、早く脱出してくれ……くっつ！」

大介は、TFOをかばったまま電流に耐え続けた。

「すまない、大介さん！」

そう言いながら甲児は、よろけながらもTFOから脱出し、丘を駆け上って安全圏へと身を寄せた。

「グググッ……！」

電流攻撃は止まない。意識が朦朧としてきた。

「くそっ！ シオルダーブーメラン！」

シュパッ！ バッシュン！

シオルダーブーメランは、尻尾を切断し、やっと大介は電流攻撃から解放された。

「はあはあ……！」

数度にわたる攻撃を浴び、大介の全身は悲鳴を上げていた。

「くそっ！ 負けるものか！」

体勢を立て直したグレンダイザーは、円盤獣と対峙した。

ピッ！ ズバババン！

円盤獣はビーム砲を発射した。

グレンダイザーは右へ飛び跳ね、難を逃れた。その

隙に、円盤獣は手に持った盾をブーメランの様に投げつけた。

ビシューーン！ ドゴンッ！

盾はグレンダイザーの脇腹に命中し、また円盤獣の手中に収まった。

倒れ込んだグレンダイザーは、スクリュークラッシュャーパンチを繰り出したが、やはり盾に遮られてダメージを与えられない。

ビシューーン！

盾は、また空を切り襲いかかってきた。グレンダイザーは倒れたまま体を仰け反らせ、盾をかるうじて避ける。

「くっそ！ なんとかしなければ……あの盾さえ無ければ……」

大介は、はあはあと肩で息をしながら案を練っていた。

「そうだ！」

グレンダイザーは立ち上がり、ダブルハーケンを取り出した。

円盤獣は、またも盾を投げつけた。その瞬間、グレンダイザーもダブルハーケンを投げつけた。

盾は、ダブルハーケンを投げて体勢が崩れたグレンダイザーの腹部に命中し、グレンダイザーは後部に

吹っ飛んだ。が、ダブルハーケンも円盤獣に命中し、両腕が切断された。

「はあはあ……今だ！ スペースサンダー！」

ズババババーン！

スペースサンダーは、見事円盤獣の腹部に直撃し大破した。

まだ残っていたミディフオー達は、円盤獣の敗北を目にしたとたん、方向転換し逃げ出していた。

「はあはあはあ……くっそっ！ 追いかけたいのは山々だが、スペイザーがやられていては無理だ！」

大介は肩を大きく揺らしながら、はあはあと喘いでいた。

「大介！ 大丈夫か？」

観測室で、コックピットモニタに向かっていった宇門は大介に声を掛けた。

大介は、何度も大きく深呼吸しながら宇門の声に答えた。

「父さん……大丈夫です。それより甲児君が負傷しました。このまま甲児君とTFOを回収して研究所に帰還します」

「うむ。ご苦労だった。気を付けて帰りましたまえ」

「はい」

大介はそう言うと、丘の上の岩陰で身を横たわらせ

ている甲児をグレンダイザーで救出した。

「大介さん、すまない……」

甲児はそう言うのと、グレンダイザーの手のひらに横たわった。

大介は甲児をTFOに搭乗させ、TFOを両手で掴み飛び上がった。

「スペイザークローズ！」

スペイザーの定位置に戻った大介は、TFOとともに研究所に帰還していった。

辺りはすっかり暗くなっていた。

研究所の格納庫に収まったグレンダイザーは、TFOを床に置き、大介はメインエンジンを切った。

「ふう……」

大介はため息をつき、瞑目しながらシートに身を沈めた。

格納庫の扉が開き、医療班と整備班がどかどか入ってきた。

大介は体を起こし、スペイザーのコックピットから飛び出し、身を翻しながら着地した。

立ち上がろうとした途端、体がよろけ前のめりになったが、すぐに立ち上がった。

医療班が、TFOに乗っている甲児を脇から支えて

コックピットから降ろした。

「甲児君、大丈夫か？」

大介はヘルメットの風防を上げ、脇を抱えられている甲児を見て小走りに近づいた。

「なあに、これくらいへっちゃらさ！」

甲児は、空元気をして見せた。

「すみません、甲児君をよろしくお願いします」

大介は、医療班の所員達に頭を下げた。

甲児は、所員の肩を借りて医務室へと向かった。

整備班の所員達が、慌ただしくグレンダイザーを点検し始めた。

「すみません、スペイザーの尾翼をやられました」

大介は、整備班の所員達に故障箇所を説明し、あれこれと指示していた。

「申し訳ありません、こんな遅い時間に手間を取らせてしまつて……」

大介は、普段ならば既に帰路に就ける時間帯であるのに、徹夜作業になつてしまうであろう事を詫びた。

「大介君、大丈夫だ。これが私達の仕事なんだから気にすることはないよ」

所員の一人が大介に声を掛けた。

「メインコンピュータの整備は僕がやりますから、尾翼をお願いします」

「大介君、君は戦闘を終えたばかりなんだから、少し体を休めたまえ。なに、俺達がちゃんと整備するか……」

「ありがとうございます。とりあえず父さんに報告してからまた来ます」

そう言うで大介は、格納庫の扉に向かって走っていった。

観測室に向かう途中、大介は戦闘服を解除し、普段着に戻っていた。

ウィーン！

観測室のドアが開き、大介が入ってきた。

「ああ大介、ご苦労だった。怪我は無いか？」

宇門は、メインスクリーンの前の椅子から立ち上がり、大介の労をねぎらった。

「大丈夫です。ご心配掛けてすみませんでした。それより甲児君が怪我をしまして……充分注意はしているつもりなのですが、申し訳ありません」

「お前の所為ではない。仕方がなかったのだ。甲児君も近づきすぎた。全く……無茶するなつてあれほど言っておいたのに……」

宇門は大介の肩に手を当てて、気にするなと言った。が、その拍子に大介は顔を歪めた。

「ん？ お前やつぱり怪我してるんじゃないのか？」

宇門は、心配そうに大介の顔を眺めた。

「いえ、大したことはありません。円盤獣の衝撃の余韻がまだ残っているだけです。大丈夫です」

大介は、笑ってそう答えた。

「今から甲児君の様子を見に行く。お前も一緒に来なさい」

そう言つて、宇門はドアに向かって歩き出した。

「父さん、すみませんが、グレンダイザーの整備をお願いしているのです。早く行つて手伝わないと……甲児君の様子は後で見に行きますから……」

大介は、宇門の後方から声を掛けた。

「いいから言うとおりにしなさい」

宇門は振り返つて、大介にきつぱりと言いつつ切った。

大介は、渋々ついていくしかなかった。

宇門と大介が医務室に入ると、治療台に甲児が寝かされていて、ドクターはてきぱきと処置を行つていた。

「ああドクター、甲児君の具合はいかがでしょう？」

宇門は、心配そうにドクターに聞いた。

ドクターと呼ばれる初老の男は、名を中村多聞と言う。この研究所内では唯一宇門より年上である。若

かりし頃は、その手腕を買われ国外でも活躍をし、名を馳せてきたが、欲が絡む医療業界に見切りを付け、今ではこの宇宙科学研究所の医療チームのメイインドクターとして働いている。

宇門は、このドクター中村に全幅の信頼を置いており、またドクターも宇門の実直さに感銘を受け、この研究所で働くことを決意したのであった。

「所長、心配入りません。頭部を6針縫いましたですが、レントゲンも脳波も異常ありませんでした。しばらく安静にしていれば、すぐに回復するでしょう」

ドクターは甲児の頭に包帯を巻きながら、宇門にそう答えた。

「所長、すみません。心配かけちゃって……」

甲児は、治療台に寝たまま宇門に詫びた。

「甲児君、あれほど無茶はいかんと言ったのに……自分分は安静にしていたまえ。いいね」

宇門は、またすぐに動き出すであろう甲児に釘を刺した。

「ああドクター、甲児君の治療が終わったら、大介も診てやつてもらえませんか？」

「父さん、僕は大丈夫です。忙しいドクターの手を患わせるほどの事はありませんから……」

大介は、慌てて宇門を制した。

「大介、言うとおりにしなさい。何も無ければそれで安心出来る」

宇門は大介に向かって強く言い聞かせた。

「こちらはもう終わりましたよ。大介君、上着を脱いでそつちの椅子に座りなさい」

そう言われると、大介は仕方なく上着を脱いで椅子に座った。

大介の裸の上半身を見るや否や、宇門は顔をしかめた。

電流を受け続けた所為か、体全体が重度の日焼けの様に赤く、ミミズ腫れが縦横無尽に走っていた。左肩口は、火傷をした様に大きな水泡が赤く腫れ上がっており、胸部は度重なる強打により所々内出血が見られた。

「大介！ 何が大丈夫なのだ。そんなにひどく腫れていて……」

「ああ父さん、これくらい何ともありませんよ。ほつといてもすぐに治りますから……」

「大介君、傷を甘く見ちゃいかん。ちゃんと治療しなさい」

ドクターはそう言うと、大介の体を診察し始めた。

「ふむ、肋骨の骨折はなさそうだな。しかしここまですごい衝撃波を受けておきながら、よくこれで済んだ

もんだな」

ドクターは、大介の体を診ながら感心していた。

「あの戦闘服は、防護機能が高いんです。だから少々の衝撃でも耐えられるんです」

「大介！　いくら防護機能がいいといっても、それだけの傷を負うんだ。もっと体を大事にしなさい」

宇門は人のことばかり気にして、いつも自分を後回しに考える大介を窘めた。

「すみません、父さん」

大介は、頭をかきながら、心配そうな顔つきの宇門に詫びた。

「とりあえず、抗生剤を塗っておこう。肩口の傷は放っておくと悪化するぞ。完治するまで毎日ちゃんと手当しに来なさい。いいね」

ドクターは、抗生剤の入った薬をガーゼに染みこませ、肩の傷に乗せて包帯で固定した。

「ありがとうございます。手間を取らせてしまって申し訳ありませんでした」

大介は傷が痛むのか、少し顔を歪めながらドクターに礼を言った。

「ああそれから、ここしばらく検査をしていなかったな。採血するから腕を出したまえ」

大介はフリード星人であるが故、地球での生活が体

に変調を来すことがしばしばあったため、ドクターは定期的に血液検査等を行っていた。

大介は右手を出し、ドクターは血液検査用の小さい試験管に大介の血液を採取した。

「ふう……ドクター、ありがとうございます。無茶ばかりする者が二人もいると大変ですな」

宇門は深いため息をつき、ときばきと治療をこなすドクターに礼を言った。

「父さん、あの、もう行ってもいいでしょうか？」

大介は、はやる気持ちを抑えつつ宇門に尋ねた。

「大介、だめだ。グレンダイザーの修理は整備班に任せて、お前はもう休みなさい」

「いえ、そう言うわけにはいきません。僕の所為で、みなさん徹夜作業になってしまうのです。僕だけが休むわけにはいきません」

大介はそう言っ、これ以上は宇門の同意を得られないと思、ドアに向かって掛けだしていった。

「待ちなさい！　大介！」

宇門は大介を制したが、大介はそのまま走り去っていった。

「はあ……あいつは、いつも他人の事ばかり気遣って無理しすぎる。もっと自分を大事にしてくれればいいものを……」



宇門はまたため息をつき、大介の身を案じた。

グレンダイザーの格納庫に向かった大介は、整備班と一緒に破損した尾翼の修理を行っていた。

グレンダイザーのボディは地球上に存在する金属では無いため、簡単には整備が進まない。溶接一つを取ってみても困難を極める。研究所の所員達は有能だが、それでも大介の指示が無ければ、なかなか思うように進まないのだ。

大介は率先して事を進め、休み無く走り回っていた。

「おい大介君。少し休憩しないか？」

整備班のリーダーである山本が大介に声を掛けた。

「申し訳ありません。こんな遅くまで作業をさせてしまつて……今日はここまでと言うことで、みなさんは休んでください。後は僕がやりますから……」

大介は、時計に目をやりながら申し訳なさそうに山本に応えた。

「何を言つてるんだ。君一人では到底無理だ。俺達はそのために居るんだから、気にするんじゃない」

山本は、常に自分たちに気を使っている大介に言葉

をかけた。  
「では、コーヒーでも持つてきましょう。ちよつと取

りに行つてきます」

そう言つて大介は扉に向かつて走つて行つた。

「ふう……そんなに気を使わなくてもいいのに……損な性分だな、彼も」

山本は一番疲れているであろう大介が、そんな素振りもみせず動いているのを見て、彼の心根の深さを思つた。

大介がラウンジでコーヒーを淹れていると、肩口の傷がキリリと痛んだ。肩に手を置き、大丈夫だ……と自分に言い聞かせた。

コーヒーが入つたカップを数個トレイに乗せてやつてきた大介は、一人一人の労をねぎらいながらカップを渡した。

「もう少し、短時間で修理が行えるように、もつと大がかりな機械を設置した方がいいですねえ。これではみなさんに、いつも迷惑を掛けてしまう」

大介は、自分もコーヒーカップを手にしたがら床に腰を下ろした。

「ああそうだな。これでは時間がかかりすぎる。いざと言うときに間に合わないことも、あるかもしれないな」

山本は、コーヒーを口に運びながら大介の案に同意した。

「しかし、俺達はなかなか経験出来ない貴重な仕事をさせてもらってますね」

整備班の一人が楽しそうに応えた。

「ほお、なかなか面白い事を言うねえ。こんな仕事は他では出来んからなあ。ははは！」

山本も同意して大声で笑った。

その笑い声を聞いて、大介は少し安堵した。

その後、整備班の所員達は、それぞれ和気藹々と雑談をしていた。

「ん？ 大介君？」

大介は壁に身体を預け眠っていた。

「おい、大介君。こんな処で寝たら風邪ひくぞ」

所員の一人が大介に声を掛けたが、大介は一向に目を覚まさなかつた。

「つたく……こんなにくだくだになるまで働かなくて

もいいのに……馬鹿なヤツだ」

山本は大介の寝顔を見て、そうつぶやいた。

「おい、毛布を持ってきてやれ。しばらく寝かしてやった方がいいだろう」

山本は所員の一人にそう言うと、大介を横たわらせて持つてきた毛布を被せてやった。

カッチャーン！

所員の一人が、道具を床に落とした。

(はっ！)

大介は、その音に目覚めた。身体には毛布が掛けられていて驚いて飛び起きた。

「すいません。いつの間にか眠ってしまったようです」

大介は、罰が悪そうにそう言うと毛布を畳み側に置いた。

「大介君、君は疲れているんだ。後は我々に任せて休みたまえ」

山本は、振り返り大介に諭すように話した。

「いえ、僕はもう大丈夫です。みなさんも少しお休みになった方が……」

「ああ、そうだな。大体の目処はついたし、今溶接が完了したところだ。次の作業に移るには、少し機体が冷やして落ち着かせた方がいいだろう」

「おーいみんな、とりあえず作業は中断して朝飯にしようぜ。少し仮眠してからまた作業再開だ。いいな」

山本は大声で所員達に声を掛けた。

所員達は、おー！ と片手を上げ、各々部署を離れて集まってきた。

「徹夜明けの飯はうまいぞー！ ははは！」

所員の一人が声を出して、笑いながら格納庫を後に

していった。

「大介君、君も朝飯にしようぜ」

山本が大介に声を掛けた。

「ありがとうございます……はっ！ しまった！」

大介は腕時計に目をやり、大声を上げた。

「すみません、牧場に行かなければなりません。どうぞ、みなさん食事してください。僕はちよつと出かけてきます。帰り次第また手伝いますから……」

「そう言うで大介は格納庫を出ようとした。

「待ちたまえ、大介君。そんなに疲れていて牧場の仕事は無理だろう。今日は休みたまえ」

山本は、慌てて出かけようとする大介の腕を引く張った。

「大丈夫です。それに昨日、仕事を途中で放り出して来てしまったのです。きつと団兵衛さんが怒ってるに違いない。だから行かないと……すみません、なるべく早く戻ってきますので」

大介はそう言うのと、格納庫を出て小走りに走り去った。

シラカバ牧場は、慌ただしく朝の仕事が始まっていた。

乳牛たちの搾乳もほぼ終わる頃、大介はバギーでやってきた。

「おはようございます。すみません、遅くなりました」

大介は、頭をかきながら慌てて搾乳を手伝った。

「遅いわよ！ 大介さん。お父さん、さつきからお冠

なんだから……」

ひかるは、搾り立ての牛乳を入れたボトルを積み込みながら大介に文句を言った。

「ごめん、ごめん、ひかるさん。それ僕がやるから……」

大介はそう言うのと、ボトルを荷車に積み込んだ。

「こおらあゝ！ 大介！ お前何やってたんだ！」

牛小屋から出てきた団兵衛は、大介の顔を見るなり怒鳴り込んで来た。

「あつ、おじさん、おはようございます。すみません、遅くなりました」

大介は作業の手を止め、団兵衛に向かって頭を下げた。

「ぼつかもーん！ 昨日は仕事をほっぽりだして行ってしまいうし、今日は遅刻するし、お前やる気あんのか？ ああ？」

団兵衛は頭から湯気が出るくらい大介に怒鳴った。

「おじさん、すみませんでした」

大介は、何度も頭を下げて謝った。

「謝ればそれで済むと思つとるのか？ ええ？ 大体なんだ最近のお前は、全くやる気がないじゃないか！ 牧場の仕事を嘗めてるのか？」

「そんなことはありません、あの、一生懸命頑張ります」

大介は、なんとか団兵衛の怒りを収めてもらおうと謝り続けた。

「大体お前は……」

「お父さん！ もういいじゃないの！ 大介さんも反省してるんだし、それに早く牛乳を届けないと今度はお父さんが遅刻するわよ！」

ひかるは、あまりにも団兵衛が怒鳴るので横やりを入れた。

「い？ あ？ わかった、それじゃ行つて来るぞ！ 大介！ お前、干し草の裁断をやつとけ！ いいか、わしが戻るまでに全部やつとけよ！ わかつたか！」

団兵衛は馬車に乗り、大介に向かってまた怒鳴った。

「わかりました。おじさん、気を付けて」

「お前に言われんでもわかつとるわいっ！」

団兵衛はまた声をあげ馬車を走らせた。

「ふう、ひかるさん、ありがとう。助かつたよ」

大介は、頭をかきながらひかるに礼を言った。

「もう、お父さんはいつも大介さんに厳しいんだから……でも、大介さん最近よく出かけるわね。研究所の仕事が忙しいの？」

ひかるは、大介に尋ねた。

「うん？ ああ……そうなんだ。あつ、早く干し草の裁断しないと、またおじさんの雷が落ちそうだ。はは……」

大介は、そう言う慌てて干し草の裁断を始めた。

食堂で山本達整備班が雑談をしながら食事をしてると、宇門がやつてきた。

「ああ、おはよう。徹夜の作業ご苦労だったねえ。進み具合はどんなものかね？」

そう言う宇門は、山本の前にコーヒーを手にして座った。

「ああ所長、おはようございます。なんとか目処がつかまりましたよ。大体未知の金属ですからねえ。大介君が率先してやつてくれるおかげで、なんとか進んでますよ」

「大介が？ あいつはずっと居たのかね？」

宇門は、山本に尋ねた。

「ええ、先ほどまで一緒にでしたよ。我々に任せて休

めって言ったんですがね。自分の所為で迷惑掛けるからって、そればかりで……かなり疲れてたんでしょう。明け方爆睡してましたよ」

「つたく……あれほど無理するなつて言っておいたのに、それじゃ身体の傷も治るはずがない……」

宇門は、頭を抱えた。

「え？ 大介君、怪我してたんですか？ そんな風には見えなかつたなあ……」

整備班の一人が横から話しかけた。

「いや、大した傷じゃ無いんだが、二・三日はまだ痛むだろう。で、大介は仮眠室かね？」

「それが……慌てて牧場へ飛んでいきましたよ」

「え？ なんだつて？」

宇門は、驚いて顔を上げた。

「今日は休めつて言ったんですがねえ。昨日も仕事を放り出して来たので、団兵衛さんが怒つてるだろうからつて……」

「ふう……団さんが……彼には大介の事を話してないからねえ」

宇門は、どうしたものかと考えあぐねた。

「こんな事続けたら、大介君まいつてしまいますよ」

「ああ、わかっている……」

宇門は、そう言つて席を立つた。

休む間もなく、大介は干し草の裁断をやっていた。シラカバ牧場は、まだオートメーション化していないため、手で押し切りを動かして裁断しなければならぬ。

大介は一時間ほど裁断をしていると、急に肩の傷が疼いてきた。大介は手を止め、肩の傷をそつと押さえて溜息をついた。

ピイピイピイ

バギーの無線のコールが聞こえた。

大介は慌ててバギーまで走つていき、マイクを手にした。

「はい、大介です」

「大介、すぐに仕事を止めて研究所に帰つてきなさい」

「またベガ星連合軍が現れたのですか？」

「いや、そうじゃない。そんなに無理するもんじゃやない。今すぐに帰つてきなさい」

「はは……父さん、大丈夫ですよ。心配いりません」

「何が大丈夫なのだ！ さつさと帰つてきなさい。いいね」

「父さん……すいません、今は帰れません……」

「大介、いい加減……」

大介は無線のスイッチを切つた。

(すいません……父さん)

大介は溜息をつくとき、そこへ団兵衛が帰ってきた。

「大介！ もう裁断は終わったのか？」

「いえ……後少しです」

「ぼつかもーん。わしが帰るまでに全部やつとけつて言つただろ！ なのに何遊んでるんだ！ 気合いがたらーん！」

団兵衛は、また怒鳴り散らした。

「すいません、後少しで終わりますから……」

「だつたら早くやらんかいっ！ つたくもう……」

大介は慌てて裁断場所まで走つていき、押し切りを動かした。

三十分程すると、やつと裁断作業が終了した。裁断した干し草をサイロの横まで一輪車で何度も運び、山積みにした。

その様子を櫓から眺めていた団兵衛はまた叫んだ。

「大介！ 終わったたら牛の手入れだ。昨日さぼつたんだからな、今日はちゃんとまじめにやるんだぞー！ いいかいー！」

「わかりましたー！」

大介は昨日のツケは大きいと、溜息をつきながらバケツに水を汲み、牛小屋に入つていった。

牛数頭の手入れが終わつた頃、また傷が痛み出し

た。手を止めて肩の傷を押さえて座り込み、溜息をついた。

そこへ団兵衛が様子を覗きにやつてきた。

「こおらー！ 大介！ またさぼつとるのかー！ まじめにやれつて言つただろがー！」

「はいはい……」

大介は、自分の間の悪さを悔いた。慌てて立ち上がり、また作業を再開した。

「くうー！ 全くもう！ わしが見張つてないと動かんヤツじゃ！」

そう言うとき、団兵衛は、入り口で仁王立ちのまま腕組みをし、苛々と大介を見張つた。

大介は、黙々と手入れを続けた。少しでも手を止めると、団兵衛の罵声が飛んでくるのだつた。

やつと牛たちの手入れが終わる頃、ひかるが入ってきた。

「お昼ご飯が出来たわよ。お食事にしましよ」

「おおそんな時間か、飯にしよう」

そう言いながら、団兵衛は小屋を出ていった。

「大介さんもお食事よ。お父さんが煩いから疲れたでしよう」

「ああ、ありがとう。いや、いつものことだから……はは」

大介は道具を片づけ、バケツを持って小屋を出ようとしたとき、太陽の眩しさに目が眩み、バケツを落としてしまった。

「あつ！」

大介は慌ててバケツを拾うとすると、

「どうしたのよ、大介さん」

そう言いながらひかるも手を伸ばし、バケツを拾い上げようとして頭同士がコンとぶつかった。

「いたつ！」

「ああ、ごめん、ごめん。大丈夫だった？」

大介は慌ててひかるの頭を撫でた。

「大丈夫よ。ちよつと当たっただけなもの。うふふ」

二人は向かい合つて微笑んだ。

「こおらああー！ 大介ー！ ひかるに手を出すなとゆーとろーが！」

自宅に入る坂の途中で、団兵衛が振り返り、叫びながら戻ってきた。

「あ……」

大介はまた自分の悪さを呪つた。

「お前、ひかるに何してるんだ！ ええ？」

団兵衛はひかるの手を引っ張り、大介に向かって怒鳴つた。

「お父さん、何怒ってるのよ！ ちよつと頭がぶつ

かっただけじゃない！」

ひかるは腰に手を当て、団兵衛に向かって文句を言った。

「なんじゃと！ 頭がぶつかるって何をしてたんだ！

大介！ 大事なひかるに手を出しおつて！」

「……」

大介は、これ以上何を言つても聞く耳を持たないであろう団兵衛に言い訳はしなかつた。

「だいたいお前みたいならふらしたヤツは、ひかるの側に近寄るな！ いいかい！ 罰として昼飯は抜きじゃい！ わかつたか！」

団兵衛は、大介にあらん限りの罵声を浴びせた。

「何よ！ お父さん、それひどいわよ！ 朝から休みなしに仕事させて、お昼抜きなんて、そんなのあんまりよ！」

「何を言つとる！ 働かざるもの食うべからずじやー！」

団兵衛は叫び続けた。

「じゃあお父さんは、お昼ご飯抜きね！ いつも働かないでUFO、UFOって遊んでばかりじゃない！」

「なんじゃとー！ わしはUFOと仲良くなる会の會長なんだぞ！ それがわしの仕事じゃー！」

「へー？ ご大層な仕事ね。ばつかじやないのお？」  
 「なんじやと！ ひかる！ お前は男のロマンがわかんらのじゃ！」

「へーんだ！ そんなのわかりませんよーだ」

ひかるは、そっぽを向いて団兵衛に文句を言っていた。

大介は、二人の会話が頭に響いてうんざりしていた。

「まあまあ、ひかるさん。僕はいいから食事してきてよ」

「だつて大介さん、お父さんがあんまりなんだから！」  
 「こらああー！ 大介！ ひかると口聞くな！ 何度言つたらわかるんじやー！ お前は馬の手入れをしてろー！」

団兵衛は、また頭から湯気が出そうなくらい怒鳴った。

「はいはい……わかりました」

大介はそう言うのと馬小屋に入つていった。

「お父さんなんか大嫌い！」

そう言うのと、ひかるは自宅へと走り去つていった。

「こりやひかる、またんかいっ！」

団兵衛も、ひかるの後を追つて走つていった。

大介は、なるべく団兵衛を怒らせないようにと思つ

ているのに、なぜこんなにも怒りを買つてしまうのか自分の要領の悪さを呪つた。

大介はバケツに水を汲み、馬の手入れをはじめた。肩の痛みが少しずつひどくなつてきたが、休んでいてはまた団兵衛の怒りを買うばかりだと手を動かし続けた。

しばらくすると、ひかるが手に包み紙を持ってやつてきた。

「大介さん、ごめんさい。お父さんが意地悪ばかり……おにぎり持つてきたわ」

「ああありがとう。でもいいのかい？ おじさんに見つかつたらまた怒鳴られるよ」

「大丈夫よ。お父さん、今お昼寝してるから」

そう言つて、干し草の上に腰を下ろした。

大介も手を止めて側に座つたが、肩の痛みが止まらず、そつと手で押さえた。

ひかるはおしぼりを渡し、包み紙を開けた。

「ああ、これは美味そうだ。そう言えば昨日から何も食べてなかつたんだ。ありがとう」

そう言つて大介はおにぎりをほおぼつた。

「え？ 大介さん、昨日から何も食べてなかつたの？」

「え？ あつ……いや、ちよつとバタバタしちゃつ



て……うん、美味しい！ ひかるさんのおにぎりは最高だね」

そう言つて、大介はひかるに微笑んだ。

ひかるは大介に誉められて、頬を赤らめながら笑つた。

美味しい、美味しいと言いながら美味しそうに食べる大介の顔を眺めていたひかるは、幸せを感じていた。

ひかるは、水筒に入れたお茶をコップに移し、大介に渡した。

「ねえ大介さん」

「ん？」

「大介さんの夢は何？」

「夢？ 夢かあ……あまり考えたこと無いけど……地球の平和かな」

「え？ それって自分の夢じゃないじゃない……そんなんじゃないやなくて、自分がやりたいことつてあるでしょ？」

「うーん、自分がやりたいことか……この牧場でずーつと働ければいいなつて思つてる」

「えー？ そんな事なのお？ それつて今と同じじゃない。そんなのおかしいじゃない。それつて夢なの？」

「え？ 僕おかしいこと言つた？」

「おかしいわよ。大介さんならもつと大きな夢を持つ

てると思つたわ」

「大きな夢？ うーん。牧場でずーつと平和に生活出来ればつて思つてるけど……それつておかしいのかい？」

「おかしいわよ！ あー！ 大介さん、私をからかつてのね。子供だと思つて馬鹿にしてるんですよ！」

「おい、ひかるさん、怒つたの？ ごめん。僕、気に障ること言つた？」

大介は、ひかるが急に怒り出した訳が分からなかつた。

「もういいわよ。大介さんつて本当にロマンのかけらも無いのね」

そう言つてひかるは立ち上がった。

「ごめん、ごめん。僕が悪かつた。今度までに考えておくよ。自分の夢を……」

「もういいわよ！ どうせ私なんか相手にしないんですよ」

そう言うつて持つてきた荷物をまとめてピツと出ていつてしまった。

（ふう……僕つてそんなにおかしいのかな？ おじさんに怒られ、ひかるさんに怒られ……）

大介は溜息ばかりついていた。

休んでいてはまた団兵衛に怒鳴られるだろうと、大

介は腰を上げた。肩はまたキリリと痛み出していた。

コツコツ、パンツ！

ひかるは、ふくれっ面をしながら台所のドアを思いつきり閉めた。

(もう、大介さんって全然ロマンチストじゃ無いんだから！)

ドアの閉まる大きな音で、団兵衛は目が覚めた。

「ありや？ なんじゃ？ ひかるか？」

団兵衛は慌てて台所へ入っていった。

「ひかる？ ひかるちゃん？ 何をそんなに怒ってるのよ？」

団兵衛がひかるの顔を見ると、かなり虫の居所が悪るい様で一瞬怯んだ。

「なんでもないわよ！ ふんっだ！」

ひかるは、団兵衛の顔を見て悪態をついた。

「ひかるちゃん、どうしたのよ？」

そう言いながらテーブルを見ると、水筒が目についてた。

「ひかる、大介に何か持っていったのかい？」

「知らないわよ。大介さんなんつて！」

「さてはひかる、大介と何かあったな？」

「何もないわよ！ 何もないから腹が立つんじゃないな

い！ もう！ お父さんは黙ってて！」

ひかるはピシャッと言い放った。

(くっそー、やはり原因は大介だな！)

団兵衛はまた腹が立って、慌てて馬小屋に走っていった。

「やい！ 大介！」

団兵衛は大介の顔を見るなり怒鳴った。

「はい？」

大介は団兵衛がいきなり怒ってきたので、訳が分からなかった。

「お前、ひかるに何をした？」

「え？ 何もしませんけど……」

大介は、きよとんとした顔で団兵衛を眺めた。

「そりや何もないからっ腹が立つって……パンツ！ ドン！ つて！ いや……要するに、ひかるが怒ってるのよ！ お前の所為だろ！」

「え？ ひかるさん、そんなに怒ってるんですか？」

「そんなに……やはりお前の所為だな！」

「す・すいませ……」

大介は、また自分が間の悪いことをしたのだろうかとう団兵衛に謝った。

「うー！ 許さーん！ 今日という今日は、もう絶対に許さんぞ！」

「すみません、おじさん……」

大介は訳が分からず謝るだけ謝った。

「うー！ 大介！ ついて来い！」

「え？ 馬の手入れはいいんですか？」

「煩いっ！ 黙ってついて来ればいいんだ！」

団兵衛の目は座っていた。そして小屋を出て行った。

大介は、どうしたものかと考えあぐねていた。

「さつさとこんか！」

団兵衛は、小屋の外から大声で怒鳴った。

「はい……」

大介は、渋々団兵衛についていくしかなかった。

自宅の裏庭まで行くと、団兵衛は振り返った。

「大介、この薪を全部割って薪小屋に入れるんだ。いか、今日中に全部やるんだぞ」

「え？ 今日中にですか？」

大介は、大きく山積みした薪を眺めて躊躇した。どう考えても二日はかかる。

「なんだ？ 文句あるのか？」

「あつ、いえ……」

「さつさとやらんか！」

大介は斧をとりだし、一本ずつ薪を割り出した。

（今日、早く帰ってグレンダイザーの整備をやらな

きやならないんだけど……これはどうあつてもおじさんは許してくれないだろう……困ったな……）

大介はそう思いながらも斧を振り上げ薪を割っていた。

カツン カツン

大介の薪割りの音が、辺りに響いていた。音が少しでも途切れようものなら、団兵衛の罵声が飛んで来るのだ。

そうやって一時間ほど薪割りをしていると、肩はズキズキと痛み、手はしびれて斧が思うように動かせなくなつた。

そこへひかるが心配してやつてきた。

「大介さん、大丈夫？ 少し休憩したら？」

「ああ、ひかるさん。さつきはごめん。なんだか凄く悪いことしちゃつたみたいで……」

そう言いながら手を止めて、そつと肩を押さえた。

「え？ お父さんがまた何か言つたの？」

「いや……あの、ひかるさんが僕の所為で凄く怒つてるって……」

そう言いながら、大介はその場に座り込んだ。

「あつ！ ごめんなさい。あれは私が悪いの。もしかしてお父さん、その事で大介さんに怒ってるの？」

「いや、どうやら僕はおじさんを怒らせることばかり

している様だ。ははは」

大介は、笑いながらも肩を押さえていた。

「私、お父さんに文句行つて来る！」

そう言つてひかるは走り出そうとしたが、大介が制止した。

「いや、いいよ。これ以上怒らせたくないし……それよりこれを早く終わらせないと……」

そう言つて立ち上がろうとすると、眩暈がして膝をついてしまった。

「大介さん、大丈夫？ これを終わらせるって、ここ  
の薪全部なの？ こんなもの考えても一日や二日で  
出来ないわよ。私やつぱりお父さんに文句言つてく  
る！」

そう言つてひかるが走り出そうとすると、団兵衛が  
また櫓の上から大声で怒鳴つた。

「大介！ 何をサボつてるんだ。さつさとやらん  
かー！」

大介はそう叫ばれて、仕方なく斧を杖変わりにして  
立ち上がった。そしてまた斧を振り上げた。

「お父さん、いい加減にしてよ！ なんでそんなに大  
介さんに無理言うのよ」

ひかるは櫓を見上げ、団兵衛に意見し出した。

「大介は、お前を怒らせた罰じゃない！ 今度という今

度はゼーつたい大介を許さーん！」

「あれは私が悪いのよ。私が勝手に怒つたのよ。大  
介さんは何も悪く無いんだから！ いい加減にして  
よ！」

ヒューン ヒューン

二人が言い争つているところに、甲児がTFOで  
やつてきた。

「おお？ 甲児君、ご帰還かねー！」

団兵衛は、櫓から手を振つた。

TFOから降りた甲児は、頭に包帯を巻いていた。

「ありやいや、甲児君、そりや名譽の負傷かね？」

「あはは！ ちよつとドジつちやつて」

甲児は、頭をかきながら大声で笑つた。

「ふむふむ、感心なヤツじゃ！ 自分の手柄をちーと  
もひけらかさん。それに比べて大介は……うー！ ア  
ヤツは何の役にもたたん！」

団兵衛は腕を組み頷いていた。

「お父さん、いい加減にしてよ。早く大介さん止めさ  
せてよ！」

「駄目といったら駄目じゃー！」

「え？ 大介さん来てるの？」

甲児は驚いた。

「甲児君、お父さんに言つてやつてよ。大介さん、朝

から休みなしで、お父さんに怒鳴られっぱなしで仕事してるのよ。その上お昼ご飯まで抜きだなんてひどすぎるわよ」

「え？ 朝からずーつと働いてるの？」

甲児は、それはいくらなんでも働き過ぎだろうと思った。昨日の戦闘はかなり手こずった上、長時間に及んだ。サボートだけの自分ですら、今日の昼まで爆睡していたくらいだ。

「何を言つとる！ だいたい昨日は仕事をほつぽり出してしまふし、今朝は遅刻する。わしが目を離すとすぐにサボる。頼んだ仕事も満足に出勤。あんなヤツ、わしが根性叩き直してやらねば、どうしようもないわいっ！」

団兵衛は、ひかるに絶対駄目だと念を押した。

「大介さんは？」

甲児は、心配になつて聞いた。

「自宅の裏で薪割りやつてるわ。お父さんつたら全部やれつて。そんなの一日や二日で出来ない量よ。大介さん、随分疲れてるみたいなの。お願いよ、甲児君。お父さんの事はいいから、大介さんを止めてよ」

ひかるは、甲児にすがつて頼んだ。

「わかつた」

甲児は、慌てて大介の処へ走つていった。

「大介さん、あんた何やつてんだよ！」

甲児は、いきなり大声で声を掛けた。

「やあ、甲児君。怪我はもういいのかい？」

大介は、手を止めて振り返つた。

「ああ……いや、俺のことなんてどうでもいい。大介さん、あんた無茶しすぎだ」

「大丈夫だよ。ここのところ仕事を抜け出すことが多かったからね。だからおじさん達に迷惑掛けてるんだ。少しでも頑張らないと……」

そう言つて大介はまた斧を振り上げた。が、力が入らず、よろけて斧は空を切つた。

「全然大丈夫じゃないじゃないか！」

「ああ、少し休憩するよ」

そう言つて大介は、溜息をつきながら座り込んだ。そしてまた肩を押さえた。

「こおらー！ 大介！ 休むんじゃない！」

団兵衛は、櫓の上から叫んだ。

「はいはい……よいしょつと……」

大介は無理矢理立ち上がり、また斧を振り上げた。「何で休んでるのがわかるんだ？ あの頑固おやじ！」

ガツツ！

「ああ、音でわかるから……」

ガツツ！

大介は、手を止めずに薪を割り続けた。

「くっそー！ 俺が文句言つてやる！」

甲児が走り出そうとする、

「甲児君、いいよ。僕が悪いんだし……君がなんか言つたら、また余計怒鳴られそうだ」

「でもこれ全部って、朝までかかっても終わらないぜ？」

ガツッ！

「ああ、そうだな。全部は無理だな……でも出来るところまでやるよ。どちらにせよ、冬支度の為にしなきゃならないからね」

ガツッ！

「大介さん……」

甲児は、これ以上大介を説得するのは無理だと思、その場を去った。

「甲児君、どうだった？」

ひかるが側にやつてきた。

「ああ、ごめん。大介さんも頑固だからなあ。何とかおじさんを説得しないと……」

甲児は、どうしたものかと考えていた。

（所長に相談してみるか……）

甲児はTFOに乗り込み、無線機のスイッチを入れた。

「所長、こちら甲児です」

「ああ、甲児君。今どこかね？」

「え？ ああ、今シラカバ牧場なんです……」

「まだ大介はそこに居るのかね？ 無線で呼んでるんだが、スイッチを切られてしまつてね」

「大介さんは居るんですけど……それが、おじさんが凄く怒つて、このところちよくちよく抜け出すのが原因らしいんですけどね。朝からずーつと休みなしで働かされてるみたいなんです」

「うーん。大介は、夕べも明け方までグレンダイザーの整備を手伝つてたらしくて、殆ど休んでないんだ」

「え？ なんですつて？ それなのにあんなに仕事してるんつか？ 大介さん、もうふらふらしてましたよ。ひかるさんや俺が言つても、大介さんは聞き入れないんだ。自分が悪いからつて……おじさんは、おじさんで、絶対許さんつて大介さんを見張つてるんですよ。所長、何とかありませんか？ このままだと大介さん、まいっちまう……」

「わかった。すぐにそつちへ行く」

「お願いします」

ふう、甲児は溜息をつきながら無線のスイッチを切つた。

TFOを降りて外にでると、また団兵衛が怒鳴つて

いた。

「大介！ 手を止めるんじゃない！ 働けー！」

「ええーい！ あの頑固おやじめっ！」

甲児は、足元の土を蹴つて悪態をついた。

しばらくして宇門がジープでやってきた。

宇門の姿を見るなり甲児は駆け寄ろうとしたが、宇門が制した。

「大介ー！ 何やってるんじゃない！ 働けー！」

団兵衛は、櫓の上から大声で叫びつばなしだった。

その声を聞いて、宇門は拳を握りしめた。だがすぐに穏やかな顔つきになった。

「おーい！ 団さん！」

宇門は、櫓の上の団兵衛に声を掛けた。

「あやや？ これは、これは、宇門センセ」

そう言うのと団兵衛は櫓からするつと降りてきた。

「いや実は、団さんにお願ひがありましたね」

「センセがわしにお願ひとな？」

「実は、先日から新しいロケットの試作をしてるんですがね、そのプロジェクトに大介もメンバーに入ってるんですよ。ところがあいつは、途中で嫌だと言いつて逃げ出してしまったのです。おかげで、せつかくの

プロジェクトが中断してしまいましたね。研究所の所員達は、全然進まないと言ってわしに文句を言ってくる始末なんです」

「なんですと！ 大介がそんな迷惑かけとるんですか！」

団兵衛は、宇門の話に身を乗り出して聞いていた。

「やはり息子である限りは、わしがびしつと意見してやらねばと思ひましてね」

「そりやそうじゃろ！ センセも大変じゃのお！」

「で、お願いなんですが、大介を研究所に連れて帰つて二・三日しごいてやろうと思つてるのですが、牧場の方も何かと忙しいでしょうし……どうでしょう？ 連れて帰つてもかまいませんか？」

宇門は、そう言つて団兵衛に聞いてみた。

「いやいや、あいつが居ても、ちーとも役にたたん。どうぞ、どうぞ、連れ帰つてびしつとしごいてやってください！」

「いやはや申し訳ない。団さんにまで迷惑掛けてしまつて……」

「いやーとんでもない」

「大介は何処ですか？」

「実は、裏庭で薪割りをさせてるんですがね、あいつは放つておくとすぐにサボるもんだから、わしがび

しつとしごいておったのです」

そう言いながら、団兵衛と宇門は連れだつて自宅の裏庭に向かった。

大介は、斧を振り上げるのも辛そうで、下ろせば下ろしたで、肩で息をして喘いでいた。

(大介……)

宇門はその姿を見て、怒りがこみ上げてくるのを必死で押さえていた。

「こりやー！ 大介！ なんだ、そのへつぴり腰は！」

大介は団兵衛にそう言われて、振り返つて驚いた。

「父さん！」

「大介！ お前は何かというヤツじゃ！ どれだけみんなに迷惑掛けたら気が済むんじや！ 早く研究所に戻つてみんなの手伝いをせんかいっ！」

団兵衛は大介に向かって怒鳴つた。

「え？」

大介は、何の事だかさっぱりわからなかつた。

「大介！ 早く研究所に戻るんだ。いいね」

そう言う宇門は、大介の腕を掴み引つ張つた。

「え？ 父さん、ちよつと……」

「黙つてわしと一緒に研究所に戻るんだ！」

宇門は、そう言つて大介の腕をぐいぐい引つ張つた。

「と・父さん……」

「団さん、お世話かけました。じゃ、しばらくよろしくお願いします」

宇門は団兵衛にそう言うと、大介をジープまで引つ張つていつて無理矢理助手席に乗せた。

「大介、みんなに迷惑掛けるんじやないぞ！」

団兵衛がそう言うと、宇門はジープを発進させた。

大介は、突然の事で面食らつていた。

「ふう……団さん相手だと疲れる……」

宇門は溜息をつきながらジープを運転し、突然怒鳴つた。

「大介！ お前は馬鹿か！ あれほど無理するなつて言つておいたのに！」

「す・すいません……」

宇門が声を荒げる事は滅多に無い。よほど頭に來ていたのであろう。そう思うと、大介は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

宇門邸の前まで来ると、宇門はジープを止めた。

「大介、降りなさい」

「研究所に行くのではないのですか？」

「あれは団さんを説得する嘘だ。今日は自宅でゆっくり身体を休めるんだ。いいね」



宇門は、そう言うのとジープを降りて、大介に手を差し伸べた。大介は、大丈夫といいながらジープを降りた。

玄関を開けてリビングに入ると、大介は深々とソファに座り込み、深い溜息をついた。

「何か飲むか？」

宇門は、そう言いながら冷蔵庫からペットボトルのスポーツ飲料を取り出し、大介に渡した。

「すいません……」

大介はキャップを開け、一気に半分飲み干した。

「はー……父さん、申し訳ない、助かりました」

大介はそう言うのと、頭をだらりとソファの背もたれに預けた。

「団さんは、いつもあんなのかね？」

宇門もソファに座り、大介に尋ねた。

「どうも僕は、要領が悪いと言うか間が悪いというか……おじさんにはよく怒鳴られるんですけど、それでも今ほどじゃ無かった。ここのとこ急いで仕事を放りだして行かねばならぬ事が多かったのです、おじさんにとつては腹立たしかったのでしょうか。おじさんが怒るのも当然なんです」

「だが、それは仕方がないことだ。お前以外に戦える者は居ない」

「わかっています。だけど、おじさんは知らない事だから無理ありません。多分そろそろ本気で怒られるだろうと覚悟はしてました。ははは」

「お前、わしが止めなかつたらどうする気だったのだ？」

「多分、おじさんは意地でも止めろとは言わないことはわかってましたから、ぶつ倒れるまでやるしかないだろうって、そこまでやらないと、おじさんの気持ちは収まらないと思つたから……でもおかげで助かりました。ははは」

「だからお前は馬鹿だというのだ！　そこまで団さんに付き合うことは無いだろう？」

「いえ、おじさんは……おじさんだけが僕を地球人として扱ってくれている。だからなるべくなら、その気持ちに応えたかつたんです。それに……」

「それに？」

「いえ……」

「それに、なんだね？」

「……それに、もしおじさんが僕を拒絶する事にでもなつたら、僕は唯一の居場所を失う……それだけはどうしても避けたかつたんです……」

大介はそう言うのと目を伏せた。

「大介……」

宇門は、大介の気持ちを考えて胸が痛んだ。大介が地球人ではないと言うことは、研究所内では周知の事実だ。所員全員仲間として受け入れてくれてはいるが、大介にとつては、自分が異端者だという思いが拭いきれないのだろう。地球人ではないと言う事実が、自分で自身の行動に歯止めをかけている。地球人として行動できる唯一の居場所が牧場なのだ。

だが、その居場所も戦闘のおかげで維持することが困難になりつつある。大介にとつては団兵衛に怒鳴られる事よりも一番辛い事なのだろう……

ふと気がつくと、大介はソファにもたれかかり眠っていた。

「大介、大介！ こんな処で寝たら風邪ひくぞ」

宇門は、大介を揺すり起こした。

「ああ、すいません。ついウトウトと……」

大介は、目を押さえながら身体を起こした。

「わしは、研究所に戻るが、ちゃんとベッドで寝ろよ」

そう言いながら宇門は立ち上がった。

「僕も行きます。グレンダイザーの整備をしなければ……」

「……」

そう言う大介も立ち上がった。

「駄目だ！ 今日はもう休みたまえ。身体を整備することも大事だぞ！」

宇門は大介を制し、リビングを出ていった。

(父さん……ありがとうございました)

大介は、既に姿が見えなくなつた宇門に頭を下げた。

辺りがすっかり暗くなつた頃、宇門はいくつかの荷物を持って自宅の玄関の戸を開けた。

なかなか言うことを聞かない息子の様子を見に帰ってきたのだった。

自宅は、何処も明かりが点いていなかった。もしかして、居ないのか？ と思いつつも大介の部屋の明かりを点けた。

大介はベッドで眠っていた。シャワーを浴びたのであろう、上半身は裸のままベッドカバーもはずさず、そのまま倒れ込んだ様に俯せに眠っていた。

「何やつてるんだ。風邪をひくだろう、そんな格好で。全く……こんなにたくたくたになるまで無理しなくとも良いのに、馬鹿なヤツだ」

宇門が自宅に戻ってきた理由は、もう一つあった。

あれから研究所に戻ると、ドクターが観測室までやつてきて、大介が治療に来ないと文句を言いに来たのだ。事の成り行きをドクターに説明すると、父親として何をしていただと怒鳴られてしまったのである。

る。宇門は、あまりに的を射ていたので返す言葉がなかった。

宇門は、ドクターに治療道具を一式持たされて大介の治療を請け負ってきたのであった。

案の定、肩の傷は悪化していた。

「こんな状態で、よく薪割りなんか出来たものだな……」

そう言うのと、宇門は大介を揺すり起こした。

「大介、大介！」

よほど疲れているのだろう、大介はうーんと返事をするものの一向に起きあがる気配はなかった。

(仕方がない、このまま治療するか)

宇門は道具を取り出し、傷口を消毒し、ガーゼにたっぷり薬を含ませて肩の傷に当てた。

「うっ……」

傷に浸みたのだろう、大介はうめき声を上げて目を覚ました。

「目が覚めたか？ 今傷の手当てをしているから、もう少し大人しくしている」

「父さん……」

大介はそうつぶやいたが、また目を閉じた。

宇門は、ガーゼをサージカルテープで固定した。

「すいません……父さん」

大介は目を少し開き、宇門に礼を言った。

「目が覚めたのなら、ちゃんと布団に入りたまえ。風邪をひくぞ」

そう言われて大介はゆつくりと身体を起こし、ベッドに座り、項垂れながら両手で顔を押さえた。

「父さん、僕のためにわざわざ帰ってきてくれたのですか？」

大介がそう言うのと宇門は、ああと応えながら道具を片づけた。

「お前のおかげで今日、ドクターに怒鳴られたよ。全く……」

宇門は、そう言いながら側に置いてあるアームチェアに座った。

「え？ 何故？」

大介は顔を上げて宇門を見た。

「毎日治療に来てと言っていたのに、なぜ来なかったのか問いただされてね。訳を説明したら、父親失格だと怒鳴られたよ。言われて返す言葉がなかった……」

そう言いながら宇門はため息をついた。

「そんな……父さん。僕が悪いんです。ドクターにはちゃんと説明します。迷惑掛けて申し訳ありませんでした」

大介は、自分の事で宇門が迷惑を被ったと思うと申

し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「いや、ドクターの言うことは当たってるさ。お前に二足の草鞋を履かせているのだからな。もつと配慮すべきだった。すまなかつた……」

「何故？ 何故父さんが謝らなければならぬのですか？ 僕が勝手にやった事で……僕は何もかも覚悟の上なんです。僕のことなんか、気にする必要はない。父さんには何の責任もないんだ」

大介は、身を乗り出して宇門に言い放った。

「大介……これでもわしは、お前の親のつもりだ」

宇門は、静かに言葉を発した。

「あ……すいませんでした」

そう言うと、大介は宇門から目をそらした。今、自分が言った言葉がどれだけ宇門を傷つけたか、大介は自分の考えのなさを思い知らされた。

「大介、もう一度寝るか？ それとも食事にするかね？」

「父さん、食事はまだですよね？ 何か作りましょう」

大介はそう言うと立ち上がり、スエットの上着を着込んだ。

「いや、今日は寿司を買ってきたのだ」

そう言うと宇門は軽く微笑んだ。

「え？ 父さん、隣町まで行って来たのですか？ ま

さか僕のために？」

「お前がいつ起きても食べられる様にと思ってた……」

宇門は、そう言うと大介の部屋を出てダイニングへと向かった。

大介は言葉が出なかつた。宇門は自分の為に、わざわざ車を飛ばして隣町まで行って来たのだ。

大介は、宇門の好意に目頭が熱くなるのを感じた。

ダイニングテーブルで、二人は向かい合わせに座り、宇門が買って来た寿司をつまみながら雑談をしていた。

「ところで父さん、今日おじさんには、なんて言っ僕を帰すように話したのですか？」

大介は宇門に事の真相を聞いてみた。

「うーん実はね、研究所で新しいロケットの試作プロジェクトがあつて、お前もメンバーに入っていると説明したんだが……お前は嫌がつてプロジェクトを抜け出してしまつて、みんなが迷惑を被つていると説明したのだ」

「え？」

「連れて帰つて二・三日ビシツとしごいてやるから帰して欲しいと話したのだ」

「……」

大介は絶句した。

「あの場合仕方がなかったのだ。団さんが気持ちよくお前を帰してくれる様にするには……団さんはあの通り頑固だし、本当の事は説明出来ない。だからわたしは一芝居打ったのだよ」

「父さん……」

大介は頭を抱えた。

「なかなか名案だろう？」

宇門は、得意げに大介に説明した。

「父さん……それって僕の立場が益々悪くなるじゃないですか。これからおじさんには、さらに怒鳴られるんだ……それでなくても能なし呼ばわりされてるのに……」

大介は、頭を抱えたまま深いため息をついた。

「だが、おかげで二・三日ゆつくり出来る。これからも抜け出すことがあっても、団さんはプロジェクトを手伝っていると思ってくれるだろう」

「……父さん、その代わり僕は、また牧場で怒鳴られっぱなしになると言う事ですね。はあ……」

「うむ……」

宇門も今になって少々不味かったか？　と思つたが後の祭りだった。

大介も、今後は牧場に行くにも覚悟して行かねばならないと肝に銘じていた。

次の日、体力が戻った大介は、グレンダイザーの整備に取りかかっていた。破損した尾翼は、山本達の手によって全て元通りに修理されていた。大介は、山本達の手腕とパワー、そして何よりもチームワークの良さに感動していた。これから益々激しくなるであろう戦いも山本達が居る事で、どれほど心の支えになるだろう。大介は心の底から感謝していた。

さすがにグレンダイザーのシステムは、大介以外触ることが出来ず、大介は一人黙々と整備を続けていた。

昼を少し回った頃、甲児が格納庫へやってきた。

「おい、大介さん！」

甲児は、グレンダイザーのコックピットで奮闘している大介に声を掛けた。

「やあ、甲児君」

「ちよつと休憩しないか？　外はいい天気だぜ」

「ああ、丁度一段落ついたところだ。今そつちに行くよ」

大介はそう言うのと、コックピットの点検パネルを閉

めて立ち上がり、勢いよく飛び降りた。

二人は連れだつて、研究所の最上階にあるヘリポートに佇んだ。

「うーん、いい天気だ。日の当たらない格納庫に居るなんて、なんだか勿体ないな」

大介は、大きく背伸びをしながら柔らかな日差しを身体いっぱい浴びていた。

「ああ、太陽の日差しが気持ちいいな」

甲児もそう言うのと、ヘリポートのコンクリートの床にゴロンと寝ころんだ。

「そろそろ牛達の運動の時間だ……どうしてるかなあ」

大介はそう言うのと甲児の側に座つた。

「あはは！ 大介さん、あれほどおじさんに怒鳴られたのに、やっぱり牧場が気になるんだ！」

「う・うん……あつそうだ。甲児君、昨日はありがとうおかげで助かつたよ」

大介は、甲児に向かつて礼を言った。

「ああ？ 俺何もしてねーよ。しかしさ昨日の所長、なかなか名演技だつたぜ」

甲児は、身体を起こし、あぐらを掻いて座つた。

「らしいね。父さんが自画自賛してたよ。全く……おかげで余計怒鳴られることが増えたつてわけさ。あ

はは」

大介は、頭を掻きながら笑つた。

「しかしさ、おじさん、何であんなに大介さんに辛く当たるんだ？ 確かに抜け出したことは悪いとは思うけど、ちよつとおかしいんじゃないのか？」

甲児は、常々疑問に思つていたことを大介に聞いてみた。

「そりゃ、おじさんにはおじさんの思いがあるのさ。仕方ないさ」

「どんな思いがあるつて言うのさ？」

益々甲児は疑問になつてきた。

「う・うーん……僕は、宇門源蔵の息子だからね」

大介は、遠くの景色を見つめながら応えた。

「それがどうして怒鳴られる理由になるんだ？」

「おじさんは、知つてるんだ。僕たちは本当の親子じゃないことを……だつてそうだろ？ おじさんと父

さんは長いつきあいなんだ。それが突然、こんな大きな男が息子だつてやつてきたんだ。普通はおかしいと思うだろ？」

大介はあぐらを掻き、肩の力を落として喋つていた。

「そりゃまあそうだけだよ……」

甲児は、それでも腑に落ちなかつた。

「父さんは、財閥で資産家なんだ。これだけの設備を個人で設営できるだけの財力がある。それが、突然息子が出来たんだ。普通は財産目当てでつて考えるだろう？」

「えー？ 大介さんが、財産目当てで養子になったと思われてるわけ？ あははは！ こりゃ傑作だ！」

甲児は、もんどり打って大笑いした。

「……初めて父さんに息子だと紹介されて牧場に行つたその数日後、おじさんに言われたよ」

大介は、俯いて語りだした。

「おじさんは僕にライフル銃を向けて、本当の目的を言え！ つて……ふふふ、僕は僕で、この人は僕を侵略者だと思つて排除しようとしているのだと思つたんだ。だいたいその頃は、まだそれほど日本語を理解していなかつたしね」

「で、大介さんはなんて答えたの？」

「……何も答えなかつたよ。説明しても理解して貰えないと思つていたし、このままここで殺されても、もう構わないと思つたんだ……もう逃げ回る事に疲れてたんだ……」

「……」

甲児は、初めて大介の心の中を見た気がした。

「ところがおじさんは、わしに認めて貰いたい的な

ら、働け、一生懸命働くんだ。そう言つたんだ……全く意味がわからなかつた。ただ、働けば自分はここに居ることが出来るんだつて、そう思つたんだ」

大介は俯いて目を閉じた。

「だから大介さんは一生懸命牧場の仕事をしてるんだ」

甲児は感心して聞いていた。

「おじさんが言つたことを本当の意味で理解したのは、随分後になつての事さ。ドクターに教えて貰つたよ。順当に行けば、僕が次に牧場の共同経営者になるわけだ。おじさんにとつては牧場の将来がかかつているんだからね、僕が中途半端な生活をしているのが許せないんだ。だから鍛えてやるつて思つてるのさ」

「なるほど……そう言う訳か！」

甲児は、やつと団兵衛が大介に辛く当たる意味がわかつた気がした。

「僕が、牧場の経営者になるなんて、そんな事出来るはずなのにね……ははは」

大介は、馬鹿馬鹿しくて大笑いした。

「ところでさ、大介さんは所長と親子つて事になつてるけど、戸籍はあんの？」

「え？ それは……」

大介は、突然の質問に少々戸惑つた。

「僕は知らない……」

「なんで？ 何で知らないのさ。自分の事だろ？ 気にならないのかい？ 戸籍がなきや、所長の跡継ぎも何も話し以前の問題じゃん」

甲児は本来ならば一番気になるであろう事を、大介が知らないのが腑に落ちなかった。

「それは僕が決める事じゃない。僕は、ただここに居られるだけでいい……それが僕の全て。それ以上は望んでないさ」

大介は遠くの景色を見つめていた。

「大介さんさあ、夢は何？」

「え？」

「俺は、いつか自分の作った円盤で宇宙を飛び回りたい……それが夢なんだ！ 大介さんにもあるだろ？ でっかい夢が……」

「ふふふ、それを聞かれたの、2度目だな」

「え？ 誰かに聞かれたのかい？」

「昨日、ひかるさんに聞かれたよ」

「で、なんて答えたんだい？」

「地球の平和」

「ぶっ！ そりゃちよつと夢つて言うのとは違う気がするなあ」

甲児は、その答えが大介らしいとは思ったが、夢と

呼ぶにはちよつと違う気がした。

「ひかるさんにもそう言われた。もつと自分のやりたい事つて無いか？ つて……だから考えて、この牧場ですつと働いていたい。そう答えたんだ」

「えー？ そりゃまた……でもそれつて夢つて言わないんじゃないのか？ なんだか凄く現実的じゃない」

「やつぱり可笑しいかい？」

「可笑しいも何も……夢つてもつとスケールがでかいものだと思うけどなあ」

「やつぱり僕は可笑しいのか……」

大介ははにかんで俯いた。

「ひかるさんは何て言つてた？」

「自分をからかつてるのか？ つて……全然ロマンチストじゃないと怒られたよ」

「ぶっぶっぶっ！ そりゃ誰だつて怒るだろ？ そんな回答されたら……」

甲児は、ひかるが怒つた顔を思い浮かべた。

「……でも、僕にとつては、そんな事も叶わない……平和に暮らすことも僕には許されない……仕方ないさ……」

大介は呟くようにそう言つて遠くの景色を眺めていた。

甲児は絶句した。自分には限りない未来があると



信じている。自分の夢を叶えるために、その努力は惜しまない。だが、大介はそうではない。地球人として生きていくことさえ簡単ではない。ましてや戸籍がなければ、この日本と言う国では自由に行動する事も出来ない。ただこの地で息を潜めて生きていくしか、今の彼には道が無いのだ。その上彼は、地球の運命まで背負ってしまった。そんな大介に、何を夢見ると言うのだろうか……

甲児は笑った自分を恥じた。

「大介さん……大介さんの夢を叶えられるように僕も一緒に頑張るよ」

「甲児君……ありがとう」

大介は振り返り甲児を真っ直ぐに見つめた。

「だけど、無茶はしないでくれよ」

「何言ってるんだよ。無茶は俺の十八番だろ？ あはは！」

二人は顔を見合わせて大笑いしていた。

大介が格納庫に戻る途中、ドクターとぼつたり出会った。

「おお大介君、元気になったようだな」

「ああドクター、ご心配をおかけしました」

「今日は、まさか来ないつもりじゃないだろうな？」

ドクターは、大介に向かって少し意地悪そうに聞いてきた。

「え？ あ……もう大丈夫なんですけど」

大介は、面みなぎそうに頭に手を当てて答えた。

「君の主治医は私だ。大丈夫かどうかは私が判断する。さっさと来たまえ」

ドクターはそう言い捨てると、さっさと医務室に向かつていった。

大介はため息をつき、ドクターの後に付いていった。

医務室に入ると、ドクターは満足そうに椅子に座った。

「上着を脱ぎたまえ」

大介は、そう言われて上半身裸になってドクターの前の椅子に座った。

ドクターは、肩に貼つてあるガーゼをはずし、ふむと頷いていた。

「君は、自分の身体をいじめるのが好きなのかね？」

ドクターは、消毒の瓶を取り出しながらそう言った。

「いえ、そんなことはありませんけど……すいません」

大介は頭に手を当てながらドクターに謝った。

「じゃ、馬鹿としか言いようがないな。良くもまあこ

んな傷で牧場の仕事が出来たもんだ」

ドクターはそう言うのと、少し乱暴に傷口に消毒薬を塗り込んだ。

「痛……う……」

大介は腕を掴み、顔を歪ませながら痛みに耐えた。

「ほほお、やはり痛いのかね？ わしはてつきり痛みなんぞ感じないのかと思つたぞ！」

ドクターは、得意満面の顔で大介に言つた。

「ド・クター……」

大介は言い返す言葉が無かつた。

「少しは自分の身体を大事にしたまえ。所長にも昨日きつく言つておいた。全く……」

ドクターはそう言いながら、薬を染みこませたガーゼを肩に貼り付けた。

「ドクター、お願いです。父さんを責めないでください。僕が悪いんですから……」

「そう思うのなら、次からこんな無茶はするんじゃない！ わかつたか！」

ドクターは大介にきつく言い聞かせた。

「はい……申し訳ありませんでした」

大介は、ドクターに深々と頭を下げた。

「しかし、団兵衛さんにも困つたもんだな」

「おじさんは、何も知らないのです。仕方ありません。」

悪いのは僕ですから……」

大介は上着を着込みながらそう答えた。

「これからは、牧場の仕事は少し控えた方がいいな。これから益々戦いは激しくなる。団兵衛さんの機嫌もさらに悪くなるだろうし……」

「やはり僕が牧場に行くことは、みんなに迷惑掛ける事なのでしようね……」

大介はそう言うのと、辛そうな顔で俯いた。

「……大介君、そんなことは無いさ。君が行きたいときに行けばいい。ただ、君にとつて辛いことなんじゃないかと思つただけさ」

ドクターはそう言うのと微笑んだ。

「辛いだなんてそんなこと……牧場は僕の居場所だから……」

「ああ、そうだったね。すまなかつた……ただ、無理はするんじゃない。所長が心配するぞ」

「ええ、わかりました」

大介は、そう言うのとドクターに頭を下げ、医務室を出ていった。

数日後、大介は整備班のリーダーの山本と新しい機材の打ち合わせをしていた。今後、グレンダイザーの不測の事態に対応するために、大がかりな設備を設置

する事になったのだ。

「これが出来上がると、整備の時間も大幅に短縮される。君も心おきなく戦えるってわけだな」

山本は大介にそう言った。

「なるべくなら、使わない方がいいんですけどね。はは」

大介は、山本にそう言って笑った。

「じゃ、後はよろしくお願いします」

大介は山本に頭を下げ、格納庫を出ていった。

大介は、ヘリポートに一人佇んでいた。

雪がちらほらと舞い降りていた。大介は雪を手のひらで受け、解けていく様を眺めていた。

「ここにいたのかね」

背後から声を掛けたのは宇門だった。

「父さん……」

大介は振り返り、宇門を見つめた。

「雪が降ってきたね。また厳しい季節がやってくる」

宇門は大介の側に立ち、同じように雪を眺めていた。

「きれいですね、雪って……心が洗われていくようだ」

大介はそう言いながら遠くを眺めた。

「大介……これをお前に見せたくてな」

宇門は、そう言うとお上の内ポケットから折り畳んだ紙切れを取り出した。

「父さん、これ……」

その紙切れには、大介の名前、生年月日、そして父の欄には、宇門源蔵の名前が記載されていた。

「お前の戸籍謄本だ」

「……どうしてこれを？」

「甲児君に言われたよ。お前の戸籍はどうなってるの  
かって」

「え？ 甲児君が？」

「お前をわしの息子にすると決めたときに、人に頼んで戸籍を作つて貰つていたのだ。戸籍が無ければ、どうしても不都合が起きたりするからね。人の目を避ける為にも必要だと思つたのだ。だが、そうすることによつてお前を束縛する事になると思い、何も話さなかつた。わしの息子と言う形をとつても、お前は自由に生きていけばいいと思つていた。だが、それは間違いだった。この日本という国は、戸籍が無ければ自由に動くことも出来ない。万が一、事件にでも巻き込まれれば、たちまち追求されるだろう……その事をお前は解つていたのだな……だからこの地から出ることもせず、牧場を唯一の居場所として守りたかつたのだろう。すまなかつた……もつと早くその事を伝える

べきだった。結局はお前を、この小さな社会に閉じこめていただけだったのだ……」

「そんな事……そんな事、考えたこともありません。こんな僕を受け入れてくれた父さんには、どれだけ感謝しているか言葉では言い尽くせない。有り難いと思っっています。僕は、ただここに居られるだけで幸せなのです。それ以上何も望まない」

「大介……お前はまだ若い。お前にも限らない未来があるのだ。もつと前向きに生きていいんだぞ」

「父さん……」

「お前は、地球人として確かに存在しているのだ。そしてわしの息子としてな。その臆本はその証なのだ」

宇門はそう言っつて微笑んだ。

「……父さん」

大介は、目頭が熱くなるのを押さえることが出来なかつた。自分の存在価値など、考えることは無意味だと思っつていた。ただこの地で息をしている。それだけが自分の全てだと思っつていた。だが、この薄っぺらい紙切れ一枚が、自分の存在を認めてくれる様で嬉しかつた。

「ありがとうございます」

大介は、満面の笑みをたたえ宇門に礼を言つた。

「お前は、もう地球人なのだ。胸を張つて生きていけ」

宇門は大介の肩に手を置き、力強くその言葉を発した。

「はい！」

大介は、力強い目で宇門を見つめた。

そして二人は並んで、雪の舞う大自然をいつまでも見つめていた。

その後、大介は再び牧場の手伝いをしていた。

「こらあー！ 大介！ ぼけつとしとらんと、さつさとやらんかいっ！」

槽の上から団兵衛がまた怒鳴つていた。

「はいはい……ふう……」

事あるごとに怒鳴られつぱなしの大介だつた。

馬のマックスが大介を追回していた。

マックスは、大介が牧場に來てから初めて生まれた馬だつた。

「マックス、仕事なんだから、あつちで遊んでろつて！ じゃないと、またおじさんに怒鳴られるじゃないか！」

ヒヒーン ヒヒーン

マックスは大介に構つて貰えなくて暴れていた。

「しょうがないなあ……」

大介はそう言うのと、マックスの首をなでてやった。

「こらあー！ 大介！ 手を止めるなー！」

「うっ！ ほら見ろ、怒られたじゃないか！」

ヒンッ ヒンッ

マックスは、すまなさそうに首を振った。

「あはは！ お前はかわいいヤツだな」

「大介さんがしばらく休んでたから、マックスは寂しかったのよ。ふふふ」

ひかるが側にやってきて、そう言った。

マックスは、大介の回りを走り回っていた。

「マックス、一緒に走るか？」

大介はマックスの背に鞍を付け、マックスにまたがった。

「それっ！」

マックスは力一杯走り出した。

「あつ、大介さん！ 待って！ 私も行くわー！」

ひかるはそう言うのと、慌てて馬に鞍を付け大介の後を追った。

「こりゃー！ 大介！ ひかる！ 何処へ行く！」

団兵衛が大声で怒鳴っていたが、二人は無視して走っていった。

「くっそー！ あいつら、全然言うことをきかんわい！ 帰ってきたら縛り首じゃ！」

夕日が沈むその中を、大介とひかるは共に走っていった。

川の畔で二人は並んで夕日を見つめていた。

「ひかるさん……」

大介は夕日を眺めながら、ひかるに声を掛けた。

「え？ なあに？」

ひかるは、呼ばれて大介を見つめた。

「僕は、この素晴らしい大地を命ある限り護りたい……それが僕の夢だ」

大介は沈みゆく夕日を力強く見つめて、ひかるにその言葉を告げた。

「大介さん、素敵な夢だわ……私も一緒に護っていきたい……」

「ありがとう……」

ひかるは夕日に染まる大介の横顔が、とても誇らしく見えた。

大介は、この平和がいつまでも続くことを祈っていた……願わくは……永遠に……